

「もう一人の自分」が集う山谷の家

⑨5 きぼうのいえ (東京都荒川区)



施設名はひらがな表記。文字文化とは縁のなかった入居者も多いことに配慮している

山谷——東京・台東区と荒川区をまたいで広がる「寄せ場」の呼び名だ。高度成長期には労働者が行き交い、「ドヤ街」として活気にあふれていた。バブル経済の崩壊後、産業構造は転換。人口減少も減少し始めた今、高齢化の足音はこの街でもはっきりと聞き取れる。「きぼうのいえ」は12年前、この地で開所した在宅型ホスピスだ。

「一般のホスピスとここの違いは衣食住の提供以上に重視する哲学的立脚点があることです」

理事長・施設長を務める山本雅基氏はきぼうのいえを「自信作」だと語る。五つの理念は次の通

りだ。①人生との和解②自己決定権の行使③無条件の愛の体験④人生における学びの重要性⑤いのちの摂理に対する全幅の信頼——確かに一般の「病院」とは一味違う。「ホームレスが入るホスピス」といった単純な図式には当てはまらない。

「きぼうのいえは医療機関ではありません。医療界ではエビデンスに基づいて診療を行うことが主流。科学が大手を振って歩いている。私たちはナラティブに基礎を置いています。つまり物語性です。ここでの『診療』はコミュニケーション、会話から始まっていくものだと思います」



4階にある礼拝堂。「私たちのターミナルケアの終着点は『死の実相』をいかにつかむかにある」(山本氏)



「ホスピスは今生の命を卒業し、死と呼びならわす世界へ旅立つ接点。この世における頂点であり、聖地です」(山本氏)



談話室。入居者同士のコミュニケーションは同じ釜の飯を食う中でだんだんと深まっていく



居室。山本氏にとって入居者は「もう一人の自分」だ



食堂。入居者以外にもご飯を食べに来るだけの人もいる。「家」は地域にも開かれている



山谷の街。住人の「代替わり」が進む。「いずれは山谷全体をホスピス化し、『聖地』としたい」(山本氏)

入居者の大半はがんをはじめとする病気以前に貧困や犯罪に直面してきた。悲嘆や懊悩おうれうに苦しめられた末に病を得る。こうした人々には「ナラティブペーストメディスン」が有効だ。彼らの人生は職員が積極的に「聴く」ことで初めて存在する機会を得る。最初から心を開いてくれる人はまれ。だが、最後までかたくなな人は一人もいなかった。

「例えば、学童疎開で東北の田舎町に行った人のお話です。その間に1945年春、東京は大空襲を受ける。親類縁者は全て亡くなりました。終戦後、単身で帰京。生きるためには何でもやったそうです。

すいとんの食い逃げ、すりの手伝い、洋モク拾い。そんな中で戦後の68年間を生き抜いてきた人です。彼がどう生き直すか。こうしたアプローチは一般の医療機関では顧みられていません」

医療のニュアンスも入っている。だが、ここで行われているのは「人間の生き直し」の作業だ。

呼吸困難にもかかわらず、救急搬送を断り、施設内で職員に抱き締められて逝った人。死を前にして学ぶ意欲に目覚め、本をむさぼり読む人。貧困と死。二つの要素が交わる地点にある入居者たちを看取る「家」は山谷の風景を変えつつある。